

## 中国四川省の高山に花を訪ねて

札幌市 梅 沢 俊

### はじめに

1994年夏、私は東京のS旅行社花見ツアー講師として、中国四川省四姑娘山<sup>スーグーニヤン</sup>周辺のトレッキングに出かける予定であった。立場上この地域の植物について下調べをして分かったのだが、彼の地では魅力的な花が、それはふんだんに見られそうだとしたことだった。だが、心待ちにしていたツアーは人が集まらず、結局中止となってしまった。

下調べなどよせばよかったと思った。今、見ておきたい花があまりにも多かった。

思い立った時に実行しなければチャンスを失いそうで、同じ地域のツアーを企画していた札幌の旅行社に打診をしてみた。「梅沢さんが参加してくれると団体割引になり、皆さん喜びます」とのこと。ならばと条件をひとつ付け、心は早くも中国の山へ飛んだ。

条件とは、高所順応日は、登山基地となる日隆<sup>リロン</sup>から近くのラマ寺ハイキングとなっていたが、私ひとりでも前日越える巴朗山<sup>パランシャン</sup>峠に戻る手配をしてもらうことであった。花を楽しむにも、高所順応にも私にはベストのタクティクスと思えたのだ。

### 7月26日

直前にキャンセルが出て、新千歳空港を飛び立ったのは結局は9人であった。メンバーは芦別山岳会関係の人が中心であっ

た。中でも会長の山岡さんは前年も目指す大姑娘山に登頂しているが、天候が悪かったので、写真を撮るための再挑戦だ。経験者を含む山や集団、心強く感じましたね。

昼、我が家を出て、夜は上海。順調なスタートだが、札幌同様中国も暑かった！

### 7月27日

上海観光の後、成都へ。観光も暑い、成都も暑い！

### 7月28日

エアコンの効いたマイクロバスで一路臥龍<sup>ウォーロン</sup>へ。途中都江堰<sup>トウチャンイェン</sup>とパンダ保護研究センターを見学。研究センターの売店で、入手不能と聞いていた臥龍地区の植物リストを発見！。安かったので二部買う。ラッキーだった。招待所泊り。臥龍の高度は2,000mほど、ぐっと涼しくなった。

### 7月29日

登山基地となる日隆へ向かう。途中にある高度4,500mの巴朗山峠越えがどうなるか？。期待と不安が入り交じる。

はじめは沢筋を走る。花が車窓をどんどん流れていく。先が長いので止めてもらうのは気が引けるので、トイレタイムをなるべく花の多そうな所にとる。

峠の登りにかかると対向する木材運搬トラックがパンクして道を塞いでいるが、運



臥龍先の沢筋に咲く *Gentiana rubicunda*。濃いピンクの花がとても目立つ。ガビサンリンドウの名で知られる。

転手がない。後続の運ちゃんに聞くと、スペアタイヤを落としたので探しに行ったとのことだ。中国を実感！したひとこまでした。

車はヘアピンカーブを繰り返し、高度計の値はどんどん上がる。私は酸素と仲良くするため深呼吸を心掛ける。3,500 m を超えると樹林はなくなり、草地の斜面ばかりとなって「チベットアツモリソウの残骸が見えてくる」なんていちいち花の名前なんぞ書いていられないくらい花が出てきた。

「青いケシ」なんぞ車道の脇に幾らでも咲いている。もう「幻の」とか「発見！」なんて言葉は赤面しちゃって使えないよ。赤い「青いケシ」も黄色い「青いケシ」も次々と現れてくる。ええい、ややっこしいのでちょっと説明しておこう。「青いケシ」はケシ科だがリシリヒナゲシなどが含まれているケシ属の花ではなく、日本にはないメコ



花は苞で囲まれた温室の中にあるボンポリトウヒレン (*Saussurea obovata*)

ノプシス属の総称として使われている。この属はヒマラヤや東部チベット、中国西南部山岳地帯を中心に50種ほど知られている。花色も黄、赤、紫など様々だが青色で大輪のものが目立つことから「青いケシ」と呼ばれているのだろう。キングドン＝ウォード著『青いケシの国』の書名が影響しているのかも知れない。青いケシに「ヒマラヤ」を付けることもあるし、モンスーン期の高山に咲き、一般には目にすることが難しいので「幻の」を付けることもあった。これからはメコノプシスと言おうね。

小雨の峠を越えて無事日隆に着いた。招待所泊り。ここの高度は3,200 m ほど。日が陰ると涼しいというより寒いくらいだ。

#### 7月30日

朝方まで冷たい雨が降り続いた。周りの山を見渡すと、うっすら雪化粧。

この日は高所順応日だ。結局全員が昨日越えてきた巴朗山峠までバスで送ってもらおう。バスとは日隆側中腹にある日本でいう「土木現業所」で午後3時に落ち合うことにして、まず花を見ながら写しながら1時間ほど臥龍側を下る。好天の下、各自勝手にお花畑をぶらぶらと下る。

想像はしていたけれど、花の多さに圧倒されそうな所だった。種名を挙げていくと、この紙面の1ページや2ページはすぐ埋まってしまうことだろう。エーデルワイス

の仲間、シオガマガクの仲間、トウヒレン属、サキシフラガ属、ゲンゲ属と属を挙げていってもキリがない。中でも昨夏、中国青海省花の旅では見られなかった赤いケシ=メコノプシス・プニケアやキク科ソロセリス属と雪蓮(トウヒレン属)の仲間がふんだんに見られたのが嬉しかった。

1時間半ほどかけて登り返し、峠での昼食後日隆側へと下る。私とカミさんは花を探しながらゆっくり下るが、他のメンバーはみるみる点となってしまう。



シッキムサクラソウ (*Primula sikkimensis*) は家畜が食べないので立派な株があちこちに



花屋で見られるデルフェニウムの超高山種 (*Delphinium monanthum*)



相変わらず花だらけの斜面が続くが、家畜の糞も多い。気をつけていたが、つい花に熱中のあまり踏んづけて滑り、ずっこけてしまった。起き上がる際、すぐ横の岩に黄色いイワウメを発見。「雲古知新」というフレーズが浮かぶがギャラリーはいなかった。いてもひんしゆくを買うだけであったかも知れない。

待ち合わせの場所では皆昼寝をしていた。高度の影響だろうか、軒をかいての熟睡の様子だった。

#### 7月31日

四川晴れ、登山日和。長坪沟と海子沟に挟まれた尾根に取付く。テントやシュラフなどは水牛の背に揺られながら後からやってくるはず。我々は軽装で花見や山見に専念できるというわけである。高度を200mほど稼ぐと四姑娘山群が一望できるお花畑に出た。6,200mを超える主峰がひとときわ鋭く天を突き抜ている。この光景に接しただけで充分満たされた気分になる。

羊の群れと共に南斜面のトラバースに移る。エーデルワイスやヤマハハコの仲間はまだ見飽きたので地味なランなどを写しながら歩く。やがて花と実が同時に付いている常緑のカシ（ヒイラギガシ）林が現れる。葉縁の鋸歯が刺状となって触れると痛い。BCまでずっとこの低い林を縫って進む。

次々に現れるツルニンジン属、デルフィニウム属、ウメバチソウ属などを楽しむうちにA旅行社のテントが常設されたラオニウエンズ老牛園子着。

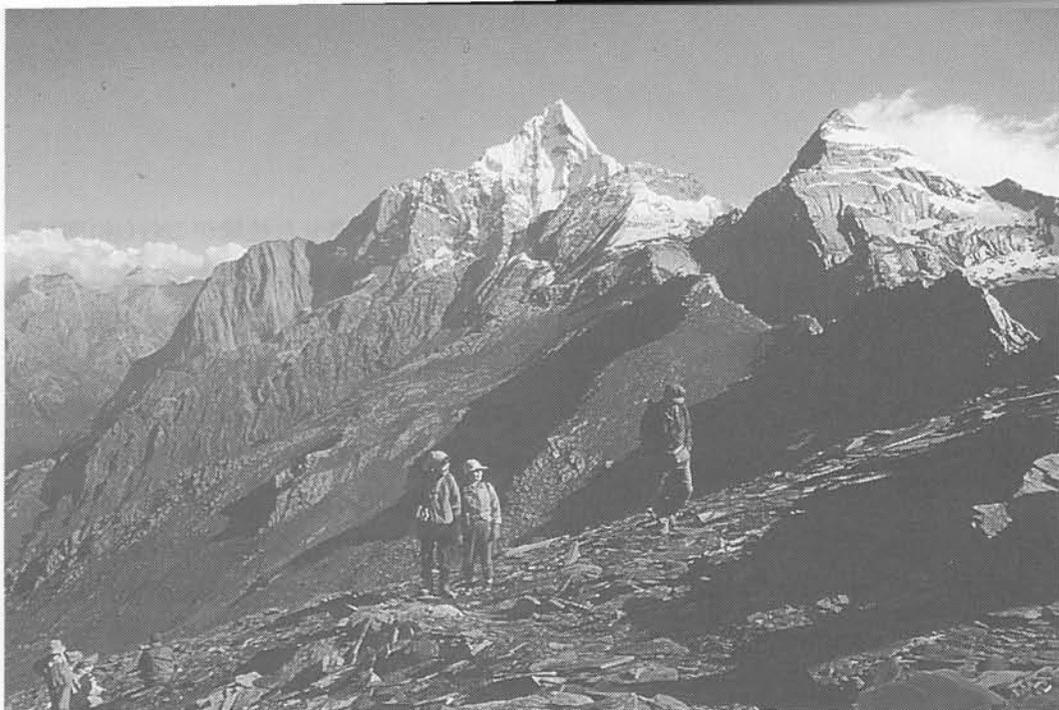
ここがBCとなる所だが、ひと悶着あり。

我々が常設テント脇に一晩の宿を設けようとした折、キッチン用と思われる大きなテントから漢族の青年が現れ、ここにテントを張ってはいけないという。A旅行社のテントは空っぽ、何も支障もないはずだが、どうして？ と尋ねると、成都の旅行社の指示なのだという。

中国語が話せないのがもどかしかったすったもんだの十数分でした。結局、丁度居合わせたこの周辺一帯の放牧用借地権を持ったチベット族青年兄弟に交渉してすんなりオーケー。なんとその兄弟は、昨年山岡さんと釣りを共にした仲であることが判明。「ヤァヤァヤァ」ですぐ酒盛りになるのが我が隊の長所。チベット族とはウマが合うなあ。漢族青年はバツが悪くなったのか、テントに引っ込んでしまった。

いかにも高山植物然として撮りやすい花だった (*Phlomis rotata*)





頂上間近となった。焦らずゆっくりと歩を運ぶ。6,250 mの高さを誇る主峰四姑娘山がまぶしい

夕食後一時雨。

#### 8月1日

明け方テントのフライが凍った。また快晴だ。高度3,600 m余りのBCから4,500 mほどのC1（アタックキャンプ）まで放牧ヤク道をゆっくり登る。中国ではピスターリと言わず、マンマンゾウ（慢慢走）と言う。

相変わらず花に囲まれての登行が続くが、中国高山帯のお花畑は北アルプスや大雪山のそれとは成因が異なっている。こちらはヤクや牛、羊などの放牧の後にできたお花畑である。シッキムサクラソウは家畜が嫌うので見事な株があちこちにあった。

高度4,000 mを超えると再びメコノブシが現れ始めた。シソ科のプロミス・ロタータも奇怪な姿を見せた。おまけに日本の代表的な高山蝶ウスバキチョウに近縁なパルナシウス属の蝶が舞っている。ウーム、別天地、別天地じゃ。

C1はカールの底のような所に設けた。設営後私は更に上部の花見に出かけた。デルフィニウム属、キオノカリス属、サキシフラガ属などのはじめて目にする花が次々と現れ、来て良かったとしみじみと思うひとときを過ごした。

撮影に熱中していたら雷を伴った夕立がやってきた。あわててテントに戻る。強い雨も2時間ほどで止み、夕食は山を眺めながらとれたが、稜線の陰になった四姑娘山は、もちろんこの日は一度も見ることはなかった。

夜、稲妻が頻繁に光り、向かいの山が数秒おきにシルエットとなって浮かんだ。音のない雷は不気味であった。

#### 8月2日

明け方の気温プラス2度。7時出発。晴れてはいるものの、雲が多いのが気掛かりだ。

稜線のコル目指してまだ陽の射さない斜



「青いケシ」の代表選手 *Meconopsis horridula*。車道脇でも見られた

面を登る。雲の量が次第に増え、近くの稜線にも懸かり始める。山岡さんは「ああ、今年も駄目か」と呟く。稜線近くなってメンバーの一人が遅れだした。その様子を見ながら休憩をとるが、チベット族のガイドさんは座ってはダメだという。かえって疲れるのだそうだ。ちなみに彼にとって大姑娘山は日隆から日帰り圏の山だという。遅れたメンバーの荷を背負い、ズボンのポケットに手を突っ込みながら、運動靴で軽々と登っていく様を我々は羨望のまなざしで眺めていましたね。

先に稜線に立ったメンバーが手を振っている。どうやら見えるらしい。そうです、稜線に出たら半ば諦めていた四姑娘山がド迫力で眼前にあったのです。小さいながら氷河を抱いた主峰から、<sup>サンクレーニャン</sup>三姑娘山、

<sup>アールクレーニャン</sup>

二姑娘山を乗せた稜線がこちらに向かっていきます。おまけに所々に雲がまとわりついて迫力を増幅させています。「出来すぎだなあ」と誰かが言いました。

コルからスレート状岩礫の斜面を慎重に登ると頂上直下の台地。残雪があって、今度来る時はここでビールを冷やそうと思ったのは私だけではないはずです。

最後の詰めも岩礫の斜面。登るに従い空が広がります。こんなに味わい深い一歩はかつてあったでしょうか。そして9時45分、大姑娘山の頂上です。眼を潤ませながら踏むメンバーもいたようです。もう花はない高度と思っていたのに、黄色いサキシフラガが登頂を祝福してくれたのはラッキーでした。

握手、記念撮影、ビールでの乾杯と恒例のセレモニーをこなしつつ、夢のような1時間は瞬く間に過ぎました。不思議なことに、楽しい時はいつもつかの間だ。

「じゃ、またな！」。ひと声投げかけ、我々は天空に輝く白峰を背にしたのであった。……とキザに、つたない紀行文を終わろうとしたのだが、下山途中のコルで雷鳥数羽が別れを惜しんでくれたのを書かないわけにはいかないのであります。まったく出来すぎの山旅でありました。

#### おわりに

四姑娘山一带はうわさ通り素晴らしい所だった。今後、この地域を訪れる人が増えると思われるので、ここにアドバイスのことをしたためておこう。

## ■高山病対策

今回の旅では誰も頭痛すら訴えないほど高所順応がうまくいった。その理由は①登山経験の豊富なメンバーが揃い、体力的に余裕があった。②日隆から巴朗山峠往復の行動が有効であった。③利尿剤を併用した人が多かったが、状況によっては大変有効と思う。④偏食者がいなく、皆現地の食事にすぐ慣れた。などの点が挙げられよう。

帰路、「高山病になった日本人を病院に届けた」車とすれ違った。苦い旅とならないよう携帯酸素ボンベなども必携であろう。

## ■テント設営地など

この地域のトレッキングはA旅行社が開拓したと聞いている。だからあちこちでA社の旗や札を見ても不思議ではなかった。しかし、その意向とは関係ないかも知れないが、今後もテント設営地の確保にはひと苦労するかも知れない。パイオニアとしてのA社には、同じトレッキングを扱う旅行社（中国側も含む）と協議し、四姑娘山トレッキングのルールづくりを是非してほしいものだ。

## ■パーティ編成など

登頂の帰路、C1付近の高度でBCからアタック途上のパーティとすれ違った。トップとラストの差が1km余り、もう隊の体を成していない状態だった。体調の良さそうな3人は頂上へ向かったが（登頂は午後2時くらいだろうか）、残りは岩の上で寝込んでいる始末。これで天候が急変したら遭難確実、ひとごとながら結構心配したものである。アタック断念組が下山を始めたのを確認して一安心したが、随分いい加

減なパーティではあった。近いうちに日本人遭難者が出てもおかしくない状況だろう。

また、C1に長野県高体連のパーティがテントを張っていた。若い人に大きな山を体験してもらうことは前向きに評価したいが、合宿用の大テントとその人数に、環境保全の面から少々気になった。

取材協力／ツアープラザ・ノマド  
注・花の名は写真を基に、中国発行の図鑑や植物誌などで調べました。標本に因る同定ではなく、大雑把なものであることをお断りしておきます。

なお、この小文は山と渓谷社発行の季刊誌『ヒストリー 1995 夏号』にカラーで掲載されたものです。

四姑娘山は四川省成都の西北西、直線距離にして120km余りにあり、横断山脈北部に含まれる山群である。姑娘は娘の意味、だから「4人姉妹の山」という意味になり、高い方から四、三、二、大を付けて呼ばれている。しかし、1981年発行の『中国登山ハンドブック』では順番が逆で、この方が理にはかなっている。

また、1993年発行の『中国登山指南』では山群を四姑娘山、主峰を么（麼）妹峰としている。この本では地形図の山の位置がずれているので、大姑娘山は5,355mになっている。中国側の情報も混乱しているようだ。

主峰の日本隊初登頂は1981年、同志社大隊が果たしている。